

よくない隣人

福田椿

(自己の内面の外在化について
それを特定の他者に投影すること
望まれる夢)

夢で見た

貴方

の匂いは、一人きりの寝室の匂いとおんなじで

私が貴方のことを、何も知らない。

ということに、どうしようもなく気づかされる。

私達の間にある

親しい。

しかし、たしかな隔たり

ただ存在している空気

私には、もう

それ以上知り得ないということ……。

でも、きつと

貴方の匂いはお兄さんの匂い。

私には、存在しない

兄がいて、

彼は私とよく似ている。

自分の嫌いなところがたくさん！ 彼の中に

透けて見える。

だからわたしはお兄さんが好き。

お兄さんと私の間には、
やはり親しい。

しかし、兄弟愛が存在しており
私達には、
はつきりと

何もかもが、分かっている。

お互いのあやまちを

たくさん、お互いの中に

認めているから、寸分違わぬ造形を信じる

そうした方法で、はじめて

貴方の（私の）唇を

私の（そして貴方の！）指先を

ゆるせるようになるというの。

お兄さん、

私以外の赦しを貴方は請うのですか

そんなことを望むのですか

貴方がどうなろうと知ったことではない。

ただ、

私とは異なるかたちの赦しが貴方に与えられることを思い浮かべて
貴方に

会うこと、夢に見る。

それを望む

いまは、それを夢に望んでいる。

始まりの景色

若狭陽太

湿ったくるみで包まれる
パンタグラフを伝う電流を知らず
それでも欠伸と共に飲み込まれた空間の中に
目的地に着くまで以外の意味を求めている
早く着いたって別にすることもないけど
眠っている間に到着するのは勿体ないものだ
閉まる扉が有限を告げ
手段が生んだ有閑を捏ねて
手持ちぶさたに
昔のことを思い出してみたり
ポケポケでカードをしばいたり
好きだったバンドの曲を聴いたり
座席にはまだ前の人の温もり
握り直すプラスチックを繋ぐ革
窓にはただ縁のないビルが流れるばかり
途中で降りる人もあった
またねと手を振り背中を見送って
その他の大勢に紛れてやっと
思い出の影でアルバムを作る
寂しさを告白し合うことに慣れてから
寂しさでは孤独を表せなくなった
すれ違う蛇がとぐろになって

もうとうに倦んでいるのに
足が動かさず気恥ずかしい

降りた瞬間にそれまでのことは忘れて
エスカレーターで改札に向かう

階段を上る人を追い越す

今度はこれが私を運ぶ

緩やかに滑る繰り返し景色

生まれてきてくれてありがとうと告げる

愛は湿ったくるみに包まれる

ガラスのヒール

佐谷戸明穂

リクルートスーツを身にまとい、ヒールを履き、とあるオフィス街を闊歩する

このコツコツって音なんだか好きなんです 強くなれた気がするから
昔の弱くて甘ったれた自分と決別できた気がするから

スーツはかっこよくて、どんな不安からも私を守ってくれる

私を見る眼差しが眩しい 私ってそんなにかっこよかったかしら？

でもそれはみせかけ、私の心にはまだまだ子どもの私が住んでいる

昨日、電車の中で足をつついてきた赤ちゃんが、仲間を見つけたかのように話しかけてきたことを思い出した

私もそのまま電車で揺られたかったな お母さんの腕の中で眠りにつくように

大人が言う事は矛盾ばかりで辟易してしまうけれど、自分の純粋な気持ちは大切にしたい

目の前に困っている人がいたら私は助けたい 繊細なものはそっと丁寧に扱いたい

これから生きていく世の中がこんなに大変なら、あの世に出かけても良いかな、なんて

私、何がしたかったんだっけ

社会に認められるには、いくらかの犠牲が必要と気づいてから、道が見えなくなりました

犠牲の上に成り立つものは何でしょうか

シンデレラのように美しい物語の中には入れないなら
私はもう一つの小説の中に生きよう
そう一人つぶやいて飯田橋駅の改札を通過した

即物的なぬくもり、その波及

清水葵衣

満ちている

満ちている

満ち満ちて

満ち足りている

満ち満ちている

満ちている

満ちている

満ち足りている

満ち足りている

満ち満ちている

満ちている

二重になっていく

インディーとディナーショーの間で

隙間の光を

愛しく思いすぎている

優しさには

優しきで返します

柔らかさには

柔らかさで返したい

すりよるマルチチーズのように

真っ白い心を

君に渡したい

午後までひきずる眠気と

かわききった喉

指数関数的な

増加

ふえていく

ふえていく

手の内をすべて見せて

皮膚をすり抜けて

二重になっていく

満ちている

満ちている

満ち足りている

満ちている

満ち満ちて

満ち足りている

満ちている

満ち足りて

満ち満ちている

満ちている

満ちている

ふと心がせる

その不可逆さと

その

ほつれや伝線

弛んだ画びょうや

右角のみ剥がれるポスターのような

いくつかの報復を

律儀に拾い上げることで

もの思いを終わらせようとしている

あたりを見渡すと

ベンジャミンからの視線は
どこまでも遠く
ととのった配置で
美しい体躯で
見る見られます
くぐもる銀に
君はうつらない
うつらない
うつらなくていいのです
綴りがとてもすべらかで
無垢につらなっていく

満ちている
満ちている
満ち満ちている
満ちている
満ち足りて
満ち足りている
満ちている
満ち満ちている
満ち満ちている
満ち足りている
満ちている
はぐくまれて
深まって
その真摯さを享受する
私はおそれず
素早く垂直に潜り込んでいく
丁寧に磨かれたものや

念入りに梳かれたものは

君のために

君のために

この国のために

あるのです

いつだって一杯一杯な私たちは

霧の向こうの刺し傷も

何も分らないで

透きとおった頬杖をつきながら

静謐で平らかなモメント

空間を

まるでそれが敷布であるかのように

泳ぎながら

じっとツキを

見ているのである

木霊の子

——ウィリアム・ブレイクへの賛辞

志田有峰

山に夜の焚火 野宮の家族囲む

あの子ただ一人 睡魔に襲われず

誰もいないが光る 木々の中の鬼火

目にして森に進む 通るは道なき道

土に濃く残った 謎の跡が導き

険しい上り坂 いつしか深き谷に

自分の名を叫び 返ってきた木霊

これにて終わる儀式 名は捧げられた

騒がしい麓 家族らが子の名呼び

疲れた足音 悲しき声の響き

聞き覚えは有り だがもう記憶の底

これで私と同じ この子も木霊の子

かぜの便り

浜田空

わるいかぜ

ゆらゆら訪ねてきたけど、無視した
代わりにあさが

いやな横面みせてぶかぶか

あさ

明るくなって、昏くなった
はち切れた感情が

いやな落ち着きがあさを包むのです

あげは蝶の幼虫

噛み砕く夢を見て、嘔吐した

ふしぎと腹は減っていて

あさをじっと見つめる

のどに詰まったあさ

かえって、おちついている

なぜか腹は

どれだけの想いも満たせない

かぜ

我がもの顔で、かおを覗かせる
どうして君は

あさの部屋にあらわれるのですか

ちかごろあなたの翳
もう見掛けないので、たぶん壊れてしまったのだろう
そしてかぜが
「もう、おやすみ。」と氣遣う

視界をおよぐさかな
かぜに飲み込まれて、焦点がずれた
きつと僕は
ひどく安らかに

おやすみ
ああ、かぜだ
そうやってふいに綴じられる

あさはしんだ
まだ居座っていたかぜ、居心地わるそうに
だって場違いなこと
まちがいなくわかっているから

sa-ya

それは 吹き抜けた春風
旅のはじまりに備えて
私 草を編んでいたら
あなたが隣に腰掛けて指した道

さあや

それは おそろいの体験
二人して歯車をまわす
対価 それで得た薬草を
あなたと煮出して飲んだ平日

サーヤ

それは 日常の乾杯
お祝いの区切りは朝に
ケーキ 駆け出しは早い方が
あなたと得する将来の未知数

咲亜弥

それは 縁に笑む比売さま
現れるのは春 詩季の円の始め
開花 促すのは整っていたから
あなたを刻印した柔らかい夢

知らない

円山璃保

うそーん？ まあそうだよねー。

自分の良心を疑ったことないだろう

自分の器用さを憎んだことないだろう

これじゃ飯が食えんとおもっているだろう

眠っているふりをしていないか

自分が健やかだと思っているだろう

悲しそうな顔しやがって

ウチの部屋には窓がない

この部屋の奥行きはこの部屋の奥行きでしかない

まぶたを閉じると拓けた土地に出る

彼女はいつもそこにいる

知らない顔が暮らす街

スクリーン眺めつつ

献立わすれないようにもする

知らない顔で暮らす事実

空を捻じ曲げる事実

この地を踏み渡り歩く事実

よその家から盗んできた事実

あたたかな食卓で等分に切り分けられていく事実

打ち立てられた明るさを

皆で読み解く午後の教室

眩しそうな顔は泣きそうな顔

ーん

うあおねーん

まどろみの輪郭で轟音がひびいている

爆散する暮らし

知らない顔が暮らす街

言葉がほどけていく

捕まえない

捕まえないことは悲しくもない

悲しくもないことに相関しない四肢

うそうそーん？ まあそうだよねーね。

消えたジェット機

消した

火曜日

杉山心

緑色の、エメラルドが。

滝から、滝から、滝から流れ落ちていた。

ヒョウ柄の羽織に、大鷲のまっすぐな羽をつけて、点けたその午後の、もんしろちよの幼虫の火を、指先を、吊り上がった糸巻の黒目が見つめている……

這って行く道にさえ戻れないほど

粒のようなその足がコンクリートを燃やしつくして、

膨れ上がったたしかな黒髪が、

木製の壁を強くしていた。

その町には、雨が降らない。

生々

松島和志

銃声ではなかった時計の針の足音に驚き、汗ばんだシャツと背中の間隙に、冷たい風が送り込まれている。私は、とにかく、書き込まれたものの上を擦っているようだが、それは彗星の尾のように、引き延ばされて、散逸されていく、だけで、消えてしまうことはない。いちごの涙は、陶器の斜面に水っぽい赤色をのこし、私は、両手で持たねばならない言葉だけを探している。

少女の中に老婆が隠れるときも美しいが、畳み込まれた記憶の布が、痛々しく場違いな音、それも大きな音を立てることは好ましい。交差路を曲がるとひらける光彩を食いつくように眺めるとき、眼の無作法さにさりげなく驚ける政治性に失望する。空白の周りをなぞるようになされるお喋りが、生きることに付きまとう独特の臭みを忘れさせることに失敗するように、諸制度は私であり、私が世界の修理工である。煤だらけの手で、頁を手繰ることがやめられないのは、私自身を修復することはまだ、できないからである。

静けさの只中のバイオリニストの第一音のように、鋭く短く引かれた線はまだ私の体に残っているが、私の大きさの違う左右の眼を見てかわいそうと言った女が、私の生をもっとも祝福していたはずだ。ある日から、高くなった天井に、居心地の悪さは感じながらも、ようやくまともに生きられる気がして、私は自分の体が流されてしまわないように、手で手を結んでいる。

花冷え

赤津将大

一本の花が
空から落ちている
わずかな時間のあいだに
幾千の線が横切り
虚空に結晶した
風の絶えない朝に
傾いて落ちるその姿を
偶像にして崇める
南の寒い国の 地下の鉱物的な温度の集会
手を繋ぎ
落ちるものをも見やらない
一組の子どもが石を蹴る
殺伐とした通学路
ひとさしゆびの弾はじかれた
仄かな軌道が翠を香り
花冷えを
そこに不動のものとして
一本の花が
空を落ちている

ワット・ウイル・アイ・ビー・ドゥーイング・ゼン？

勝圭央

膨らんだ繊維のマイナスZ軸へ行った、三分の一日後

わたしの瑠璃には灯が映っているだろう

連れ添う岩から太ましい丸にすげ替わったブルーバック

透過する天井を焦がすヘリウムによつて

潰れて熟れたトマトが実っているだろう

あるいは、もしかすれば

わたしが入った肉は、まだ沈没し続けているかもしれない

かたさの裏側はたえという地平線

空行く竜の膚はだえから遣わされた水平線へ

不可視の壁との間の不和

生み出された橙を容れ物の表面で嗅ぎながら

骨間に残るミントを噛みながら水平になった、二の三乗時間後

わたしの石英は焼けた酸素と向き合っているだろう

抜け出せない水流に抱かれたルーティン

そこに絡み付いたわだかまりは解けている

しかし、同時に

重ねられてきた巻物は吹き飛ばされ

ささやかな幸福は立ち退かされている

災いは何も弁えない

もしくは、ひよつとしたら、とつくに

世界を捉えるべきわたしの硝子は溶けているかもしれない

羽毛の谷に牽引されて

肌色に温まったエンドロールを見届けながら

熱い稜線に落ちるひとしずくとなつてゐるかもしれない
それは幸運と言えるだろう

歯を整え、布団に沈み込んだ八時間後の保障

それは泥船さえ恐れおののく

わたしが再び世界を捉えたときの

安らぎの居場所は目の前か昨日か

あるいは

おはようもなく朝

生野来実

白く柔らかい一粒の塊から米の匂いが立つようにゆらめいて霞んでゆく

温かい憧れが軽々と昇る時 一つの答えを示して私を置き去りにした

やるべきことよりも やりたいことのために

レムの谷間をさまよっています、と言えたなら この唇はひび割れていなか
ったか

赤ちゃんの指の間に隠れている酸っぱい味に似た水溜まりが

頬を湿らし、膨らむ綿を撫でつけていた

布の温みは私を花束のように優しく抱いて

ふいにぶつかった壁は冷たいままスコーンになりきっている

時間との勝負をしているような足裏が床を叩く振動に 壁とともに揺らされ

兄と母のファッションチェックする話し声に 緩く閉じている瞼をまた力ま
せられた

兄のためにレンチンで熱せられた豚肉

臭いはアスファルトを歩いた靴底

しかめた全身で頭上の文字盤を睨みつければ

生活を便利にするために生まれたスマホが眉間に向かって滑り落ちてくる

アラームは六年前から切れていた

中木の上で揺れるカーテンの影が薄く 電気代の眩しさに目覚める

燻り

岩花陸

破綻から始まる物語

絵のない絵本、命のエラッタ

プロローグは読み飛ばした

そのくせに

玩具を片付けるのが嫌いで

思い出とお別れが出来なくて

くすんだフィルムが積み重なる

全ては予定調和

病名は付かなかった

ヴォイニツチの楽譜で奏でる

あの旋律で絞め殺して

花になって散りたいの

徒花がいい

墓標に供えられる、実のない花が

それだけで良かったのに

終止符を夢見たはずが

延命治療は成功

ゾンビの誕生祭

負け戦がお上手なようで

矢印は苦手

十字架にはなれない

どこにも行けずに転がり続けて

下流の石になった

欠けて失くした

色も味も

万華鏡は硝子の屑に

使い終わったペレットみたいで

絵の具はあまり美味しくない

不意に落ちた雷で泥になって

毒虫になれたら本望だ

有益な不快害虫に

陽の光を避けて行く道

ある日差した汚い虹

空に境界線が引かれた

名付けられない故の孤独と

蛹のまま眠るよすがに

カーテンが開け放たれる

まだ成りたくはなかった

選択肢など要らなかったのに

知らぬが仏を知らぬ愚かよ

ならばいっそ

シャボン玉にでもなればいいのだ

幼稚園児の小指のように

いずれ錆び付く絵空

七千三百と少しの言い訳

小鳥の囀りに返す言葉もない

鏡を叩き割る勇気さえ

埃に埋めたタイムカプセルの中

解答欄は空白のまま伏せり

継ぎ接いだ夢に蓋をして

花の中眠りたい
それだけ

消去の魔法

志水風香

勝てないから消去される

関係のない人に消されてしまったらしい

割れたガラスの接着剤は無い 割ってしまったら謝ります

謝罪ができて偉い人 器は傾いていない

ガラスは置き去り 偉い人に集う消去ボタン

片手の人も 重装備の人も 同じ弾を撃っている

破片は拾ったからもう大丈夫 もう割れてないみたい

というより なおらないと消される

火事がガラスを溶かして 海が悪意を飲む

わざとじゃないんです

そうだよね

年を取れば自然と大人になると考えていた
面^{おもて}みたい。飛ばす

自分にはそれがどうにもわからない
友人に連れ添って入った喫煙所のなか
わたしだけが「吸う」を選択しなかった
けど皆そうだから
きつと私もいつかそうなるんだろう？

SELECT

▼ながれにみをまかせる
ながれにあらがう

粹へ属す

常識を装備し

Lvを上げ、労働する

賃金で体力を回復する

変えようとする者はいない

次のステージに進めば、これは通用しなくなるから
フラグを回収しないことにこそ喜びがある

無意味に連打するボタンの裏には小さい針がある

縫い進めると

当初は薄衣だったはずのそれが

すでに十二単を越えるぐらいに着こまれていて
裾を汚していた

引き摺ったそれを踏んで転んでしまう前に

AとBとXとYとSELECTとSTARTを一緒に押す

少しずれていても問題はない

▼戻る

虹を歪めたような三原色の明滅

へんてこな世界は選択のひとつである

であれば B ボタンは押すべきでないと思われがちであるが

概ね ZR、ZL が優先されるから必要のないだけである

*作中名詞についての追記

・面↓アクションゲームにおけるステージのこと。2D マリオやカービィにて通称として使われる。

・ZR、ZL↓ゲームコントローラーのボタンのうちのひとつ。用途は様々だが攻撃やショートカットが割り振られていることが多い

木漏れ日

杉山智哉

妻の淹れた珈琲を夫が嗜んでいる
路傍に落ちる雨の音が
まだ終わってほしくない
干渉のない緩やかな時間の流れは
床に運ぶ温度になっている
商店街の茜色 散歩道の曙色
石を蹴って 川を覗いた
どこにでも落ちているような
温度に包み込まれる
二人の邪魔をしまいと
庭の金魚鉢に蛙が飛び込んだ
古書の香りと茶の香りに音がして
懐かしむ間隙が落ちていき
底のない記憶の中で
鳩の鳴く縁側の風鈴を揺らす
畳の匂いの奥にある
扇風機の音に目を瞑り
百日紅の花を思い浮かべて
深い香りの珈琲を一口啜った
麦わら帽子から薄茶色の髪が靡く
目線の先で猫が何かを追いかけていた
夏影に隠れながら
目に入るものを言葉にする声
肌を撫でる感覚を残して

不規則なリズムの足音の隙間に
柔らかな抑揚を見つけた
細く小さな手に引かれ
池を覗く横顔に
来年もまた触れていたいと
遊歩道を並んで歩いた
雨の落ちる音がする
庭の蛙が
角砂糖の入ったガラス瓶を睨んでいた
蓋を持ち上げる重たさが
もう何年も前の
珈琲の香りを連れてきて
溶けた甘さを溢さぬよう
麦わら帽子の記憶で掬った
赤く溶けた唇の柔らかさが
思い出を巡らせ
淡く濡れた肌を噛み
花が散る瞬間の小さな音が
深い温度になり命を産んだ
それはごく自然の流れであって
それがあるから
今の私があるのだと
まだ誰も知らないだろうけれど
扇風機に当たりながら
線香の香りを横に置き
庭の百日紅が花を咲かせている

星へ

浅岡美月

薄い空気の層に一番近かった星が沈んだ
昼の余熱を吸い込んで
小指の爪より遠い星をつなぐ
光ですら何千万年かかかすることを知らないで
指先でいたずらに
羊皮紙に描かれた形が
月の向こうを流れている
天球に遠い星が満ちていたとき
首長竜たちがそれを見上げていた
星の中で生まれた元素が
死と共に流れ
土の上を集まり
自分たちが生まれたことを知らないで
足の指に絡んだ砂粒は
何億年も前
涙膜を通り過ぎた星の遺骨
それは髪になって
舌に擦れる歯になって
喉を湿らす吐息になった
薄い空気の層に星が近づいてくる
天球をなぞる指先を
私はこうして死んだのだよと
古い光がにわか削る
つながれた星の形は

羊皮紙の上と随分変わったのだと
欠けた爪先も知らないで

真夏日

川口瑛璃

時刻はもう真夏日

四人がけのダイニングテーブルには
セロリのサラダ、肉じゃが、キムチ、少々の白飯、
溶け残った氷、麦茶、絆創膏、
日誌と呼べぬものが、佇んでいた

安寧の地

いたくじゃがいもが煮えていたという噂は
はるか遠くの秋にまでとどろいていたという
わたしは向かいの席に
先程まで熱視線を送っていたアスファルトを遊泳させた
それは、息を帯びない木目の眼差しと混合し
互いの熱が過干渉し合っている

そのたわむれに手を貸そうとすると、ひどく湿気た空気が
丸みを帯びた輪郭をもってして静止する

水面に浮かべた時計は

否

水面に浮かべばよいとした時計は

おだやかに溶けゆく

すべてが仕組まれたホログラムのように

まっさきになくなってゆく

溶け残った外側だけが

わたしをひどく焦燥させる

滑り台

楊楚豪

雪が降り注いでいた

子供の心に深く刻まれる一瞬が訪れた

滑り台の頂で立ちすくんでいた

初めての雪が降り積もる中

白が新しい世界を告げる

家の中で両親が麻雀に興じる音が遠く

静けさが雪の中へと誘う

滑り降りる勇気を持って

見守るばかりだった

足元が滑り

冷たさの中で

奥深くに残る記憶となる

滑り台のように立ちすくむ影たち

LGBTの友人たちは

その姿を隠しながら

雪の中で一步を踏み出す勇気を見せている

それぞれの足跡が、雪の中に淡く残り

進む道のりが

深い静けさに包まれながら

ゆっくと織り成されていく

一緒にあの雪の日に戻り

すべてのラベルを取り払い

ただの友人として
滑り台を共に滑り降り
安定して地面に着地する